名門伝説 第11回

# 熊谷工業高校（埼玉県）

## 不屈の精神で頂点を目指した男たち

DATA
- 正式名称：熊谷工業高校ラグビー部
- 学校創立：1920年
- ラグビー部創部：1948年
- 所在地：〒360-0832 埼玉県熊谷市小島820

90年度、念願の日本一を手に入れたチーム。1年時は東のAシードながら初戦敗退、2年時は県予選準決勝で敗れた先輩たちの無念を晴らした。相手の天理高・田中克己監督が、「うちがやりたかったラグビーをされた」と言うほどのメンタルの強さが勝因だった

86年度、花園決勝での最後のハーフタイム。森監督は、発熱にも試合に出場したSH堀越正巳（左）に途中交代を告げた

### 初心者を育てる伝統

86年度花園決勝。国学院久我山高に敗れた選手たちの涙は止まらない。どうしても勝ちたかった。

創部から全国の強豪にまで育ててきた森喜雄監督が、この年の3月に定年退職。この決勝戦がラストマッチだった。試合後、泣きじゃくりながら花園第1グラウンドの中央で監督を胴上げ。選手たちは「監督に申し訳ない」と繰り返した。

しかし、「優勝にも匹敵するものでした。これまで育ててきた選手たちすべての代表として胴上げしてくれたように感じた。本当にうれしかった」と森元監督はあの感触を忘れない。退任までの39年間に500人近い卒業生が生まれていた。親子2代にわたりプレーした選手がいるほどの年月だった。

戦後の動乱期、ラグビー部を創部させた情熱は計り知れない。熊谷の河川敷で1個のボールを全員で追いかけた。足にはスパイクではなく地下足袋を、ストッキングは腹巻を切って代用した。この時代の選手たちが、試合をできるまでに成長し、さらに『勝ちたい』という気持ちが芽生えたことが、のちの繁栄につながる。

現在でこそ、ラグビースクールや中学ラグビー経験者が入部してくるが、全国大会で強さを見せた80年代から90年代は、部員の大半が初心者たち。初めてボールに触れた高校生が、やがては花園で頂点を懸けて戦う。その分、時間は必要だったが、基本から丁寧に教えた。形を覚えるだけでなく、何が大切なのかという意味を理解させる。そんな育てるノウハウが伝統として根付き始めたことで、チームは上昇曲線を描いた。

森監督の下で5年間コーチを務め、2代目監督に就任した塚田朗監督が90年度、日本一をつかんだ。決勝戦で下した相手が超高校級の技術を持った天理高。相手の長所を出させない戦いぶりは、鮮やかな記憶として残る。入学してきたときとは違い、3年間で培った強い気持ちが試合を支配していた。

ラグビーは人間を作る。森監督が持ち続けた信念だ。タックルしても吹っ飛ばされる、キックをチャージされる。60分の試合の中にはさまざまな困難が待っている。それを乗り越えるメンタリティーを持って卒業して欲しいという願いが込められていた。そして、やがては社会で直面する難局にも立ち向かえる人間になる。

現在は4代目となる新野好之監督が指揮を執る。14年間、花園から遠ざかるが、2010年度の決勝戦を見たサッカー部の選手2人が入部を志願してきたという。高校生の心を動かす何かを秘めたチームに成長している。今思えば、花園頂点を目指したあの時代も、観客に伝わってくる何かがあった。



## 熊谷工業高校 History of Kumagaya Technical high school Rugby

### ラグビー部の歴史

| | |
|---|---|
| 1948年度 | 熊谷商工ラグビー部創部 |
| | 森喜雄監督就任 |
| 1953年度 | 国体初出場 |
| 1958年度 | 埼玉県勢初の全国高校大会出場 |
| | 天理高を下しベスト16進出 |
| 1966年度 | 熊谷商工が熊谷工、熊谷商に分離 |
| 1978年度 | 全国高校大会で初のベスト8 |
| 1981年度 | 第61回全国高校大会3位 |
| 1984年度 | 第64回全国高校大会3位 |
| 1985年度 | 第65回全国高校大会3位 熊谷工主力の埼玉選抜が国体初優勝 |
| 1986年度 | 第66回全国高校大会準優勝 |
| 1987年度 | 塚田朗監督就任 |
| 1990年度 | 第70回全国高校大会初優勝 |
| 2002年度 | 中原雅史監督就任 |
| 2009年度 | 新野好之監督就任 |

**1948年度** 1年の終わりから主将となった新井広志（前列左から2人目）

### 森喜雄監督の情熱で誕生

48年初め、同好会として発足。学校近くの荒川河川敷で練習する日々で、生徒全員でお金を出し合って買ったボールを追いかけた。

**1978年度** FW戦で途中から試合を有利に進めたが、スキを突かれた

### 準々決勝で大分舞鶴に惜敗

初のベスト8進出に勢いに乗る熊谷工は、後半18分、FB小島正秀のトライで16—13と逆転したが、26分にキックチャージから再逆転された。

**1981年度** 準決勝で敗れたものの、史上初の3位入賞だった

### FW戦圧倒も決勝に1点届かず

花園高を完封して臨んだ秋田工高との準決勝。後半、風上に立った熊谷工がFW戦で優位に立ちリードしたが、9—10とPGで逆転負けした。

**1984年度** 15人のバランスがよく、優勝を狙えるチームだった

### 優勝した秋田工を追いつめる

3年ぶり2度目の準決勝は、前回と同じ秋田工と対戦。激しいタックルを軸に有利に試合を進めたが、終盤に決勝トライを許し10—14。スクラムの強いフロントローの故障が痛かった。

**1985年度** SO加藤尋久を中心に高いレベルのチームだった

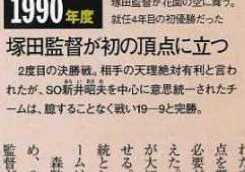
### 準決勝で大東大一に敗れる

2年連続の準決勝進出は、大東大一高にスクラムトライを許すなどFW戦で苦戦。相手防御にも苦しめられ、トライを奪えず3—15と敗れた。

**1986年度** 豊富な運動量で動き続けたFW陣

### 決勝で久我山に敗れ、準優勝

初の決勝戦は手のうちをよく知る国学院久我山高が相手。要のSH堀越が発熱するなど万全ではなく、テンポある攻撃が生まれず、6—22と完敗。



**1990年度** 塚田監督が花園の空に舞う。就任4年目の初優勝だった

### 塚田監督が初の頂点に立つ

2度目の決勝戦。相手の天理絶対有利と言われたが、SO新井昭夫を中心に意思統一されたチームは、臆することなく戦い19—9と完勝。



名門伝説 Tradition 第11回

## 指導者を生む 名選手が名指導者へ

現役引退後、指導者として成功しているOBたちが多い。同時期にHB団を組んだSH堀越、SO加藤は、早明戦でも対戦したが、現在は関東大学リーグ戦でともに監督として対戦する。

90年度卒 深谷中監督 → 86年度卒 立正大監督 → 85年度卒 深谷高監督 → 85年度卒 日大監督 → 79年度卒 流経大柏高監督

**新井昭夫**（あらい・あきお）
初優勝を手繰り寄せた司令塔。社会人での経験も生かし、中学の教員として人材を発掘・育成する

**堀越正己**（ほりこし・まさみ）
ラグビーを通じた人間教育が魅力だ。日本を代表するSHだっただけに、そこにはこだわりがある

**横田典之**（よこた・のりゆき）
忠実なLOとして活躍したように、指導者としても急がず、土台を作り、深谷高で成功を収めている

**加藤尋久**（かとう・ひろなが）
運動能力が高く、理論も定評がある。明大、セコム、東海大、日大と潜在能力を開花させている

**松井英幸**（まつい・ひでゆき）
左PRだけあって、スクラムへのこだわりは指導にも表れ、千葉の流経大柏高を全国屈指の強豪に育てた

Tradition 1

## ジャージー

▶鮮やかな青であるブリリアント・コンクブルーのジャージー

### 秘められた三色の意味 煌・青×強・黒×燃・赤

熊谷商工時代は赤と黒の段柄で、41年の商工分離により、工業は水色と白の段柄となり、校長の名（八木）から胸にヤギのマークを入れた。67年、地元国体開催時、全埼玉監督を務めた森喜雄監督が、国体ジャージーをデザインしたばかりか、熊谷工高のファーストジャージーにも採用。鮮やかなブルーにもこだわりがあり、チームが煌めくという意味を込めて、ブリリアント・コンクブルーと呼び、黒は強さ、赤は燃える火を表している。

（写真右）白と水色の段柄が最初（写真左）日本一当時のセカンドジャージー

▶現在のジャージーは歴代のものよりもブルーが濃い

Tradition 2

## OBに聞く

### 走り勝つしかないという文化

中3のとき、親父の幼馴染みの方が熊谷工業ラグビー部のOBということで、雨の中の試合を見に行ったのがきっかけです。その日に一目ぼれ。ボールがどこへ行くのか予想もつかないスポーツで、それまでやっていた野球にはない魅力が詰まっていた。入学前からテレビや雑誌でラグビーを見るようになり、早明戦で印象的だった明治に行こうと思っていました。入学してみて練習はきつかったですが、右も左も分からないのだからそれが当たり前でしたね。ランパスはウォーミングアップだったし、大きくない選手たちだから、走って勝つしかないという文化が熊谷工業のラグビー部には根付いていた。それとタックルですね。森（喜雄）先生の教えは基本の徹底。体作りから、一つひとつのプレーまで、すべて反復して体に染み込ませる。当時、8割以上が未経験者だと記憶していますが、あの練習があったから花園でも堂々と戦えたのでしょう。現在はしばらく花園には出場していませんが、OBの新野（好之）監督が頑張っていると聞いています。立て直すというのは大変なことですが、まずは埼玉県予選の決勝に行くチームからだと思います。

**加藤尋久**
かとう・ひろなが
●1967年6月16日生まれ。埼玉県出身。熊谷工高→明大→神戸製鋼。攻撃力、ゲームコントロールに優れたSO／CTBだった。引退後は、明大、セコム、東海大、日大などで指導力を発揮している。元日本代表。

在学中は2、3年と連続して全国3位。ともにあと一歩、わずかな差で敗れた

Tradition 3

名門伝説 Tradition 第11回

## 熊谷工高校歴代ベスト15

同校最多キャップの堀越と90年度日本一のSO新井、SO／CTB加藤が大きな軸となる。澤田国治、阮申琦、石井泰三の3列は、その後も仕事人として活躍したように、このチームの心臓部だろう。新野兄弟の得点力も魅力の一つ。

## 悩み抜いた上での決断

### 熊谷商工分離

66年、熊谷商工は、商業科の女子生徒の急増で、工業科との並立共存が困難となり、熊谷工業、熊谷商業に分離されることになった。そこで森監督を悩ませたのはどちらに行くかということ。商業科にラグビー部員が圧倒的に多く、翌年に控えた埼玉国体強化選手も商業科が中心だったが、ラグビーは全国的に工業高校が強いなどさまざまなことを熟慮した末、熊谷工業高校転任を決めた。これがのちの繁栄を左右した。

熊谷商は赤と黒の段柄、熊谷工は白と水色の段柄ジャージーだった

Tradition 4

## トップレフリー輩出

### トップレフリーが監督就任

現在は指導者に専念しているが、熊谷工3代目監督の中原雅史、現監督の新野好之は、トップレフリーとして活躍した。高校日本代表にも選出されたLO加藤均は、ケガで一線を退いたあとレフリーを目指し、現在は関東協会A2レフリーとして活躍中。

（写真左）現在の新野好之監督はスピードがあり、決定力のあるBKとして活躍（写真右）3代目の中原雅史監督は力強いHOだった

Tradition 5

## 日本代表

### 好バックス陣を輩出

数々の歴史的試合に出場した堀越（写真上）がキャップ数で大きくリードしている。同校初キャップは、82年のアジア大会に出場したスピードあふれるWTBだった渡辺登。明大、横河電機でプレーした。SO安藤栄次（写真下）は基本に忠実なプレーでキャップを積み重ねた。

**熊谷工OBの日本代表キャップ保持者**

| 名前 | 卒業年度 | 代表キャップ |
|---|---|---|
| 堀越正巳 | 1987年度 | 26 |
| 安藤栄次 | 2000年度 | 13 |
| 加藤尋久 | 1986年度 | 2 |
| 渡辺登 | 1974年度 | 1 |

Tradition 6

## 2011年度チーム

1月16日（日） 埼玉県新人大会

熊谷工 73（33-0, 40-0）0 浦和工

**出場メンバー**
1 宇田川航平①
2 岡田美平②
3 大谷岳己②
4 高橋祐充①
5 中村俊仁②
6 水出耕平②
7 木暮 淳②
8 福島秀幸②
9 植竹克明②
10 渡辺啓太②
11 関口俊輝②
12 和田真知②
13 大久保光也②
14 山田竜也②
15 長岡凌平②
▼文代なし

※丸数字は学年

### 全国大会の舞台に戻れるか

2010年度は埼玉県第1地区で決勝進出も、正智深谷に敗れ全国大会に届かず。その後1、2年生の新チームが始動し、1月に新人大会を戦った。昨年度から主力の植竹克明主将、渡辺啓太や長岡凌平を中心にBK陣が充実し、サイズのあるFWもそろう。新野好之監督は「昨年の決勝進出に満足せず、その上を目指す」と語る。

昨年度からハーフ団でコンビを組むSH植竹（右端）、SO渡辺が攻撃のカギを握る

次号第12号は大阪体育大です

1991年1月7日 花園ラグビー場

PICK UP GAME 6 第70回全国高校大会決勝

# ひたむきなタックルでトライ許さず 熊谷工が悲願成就 埼玉県勢初優勝

### 挟み込む防御で徹底マーク

17年ぶりの連覇を目指す天理は、前年の優勝経験者9人を含み、高校日本代表候補5人をそろえ盤石と思える布陣だった。緩急を織り交ぜたゲームメークが光るSH西田英樹、SO文平龍太のHB団、スピードに強さも兼ね備えたライン参加で大きな得点源のFB渡辺大吾、強烈な好タックラー松村径ら超高校級に加え仕事人が脇を固める。準々決勝こそ西陵商に13—12と1点差に詰め寄られたが、前評判通り決勝戦に進出してきた。

一方、準決勝で大阪工大高を16—10と破って決勝進出を決めた熊谷工。塚田朗監督は、決勝戦前日の記者会見で「大工大高が大きな山なら、天理は天の山」と話した。相手の驚異的なストロングポイントを感じながらも、鍛え込んだスクラム、FW勝負は計算できると信じた。しかし、そのうえで塚田監督の出した指示は、FWによるパワー勝負でなく、ディフェンスを起点にすることだった。

「スクラムは前5人で対応できるはず。両フランカーは素早くブレークしてSO文平を狙え。CTBの2人はFB渡辺がライン参加してきたら挟み込め」と、一人でダメなら、皆で包み込んで止める作戦を指示していた。

開始直後、天理はSO文平が敵陣深く蹴り込み、熊谷工の反則を誘うと、強風の中、その文平がPGを成功させる。少人数のラックで連続攻撃を仕掛け、FWもライン参加して走る。天理にとって理想的な滑り出しだったが、この先制点だけでなく、スクラムを組んでも、相手にタックルしても、熊谷工フィフティーンに動揺はなかった。

「ビデオで研究した通りでした。次に何をするのか分かった。ラックを何とかすれば相手の得意な連続攻撃は阻止できる」と熊谷工・SH亀山昭は感じたという。

6分には天理陣でモールを押し込み、パイルアップもゴール前スクラムを得た熊谷工。得意のスクラムを押し込み、NO8岸田悟が逆転のトライを奪った。生命線のモール、スクラムが通用したことで、熊谷工は勢いに乗った。ディフェンスに集中していれば再びチャンスは来るはずだ。意志統一は明確だった。

そして熊谷工の最大の武器であるSO新井昭夫主将が21分、28分とPGを決める。軸足の左足ヒザの靭帯をケガしていたが、このとき「ヒザの靭帯は大丈夫だ。ボールをください」と、ケガをものともしない強烈なタックルを連発した。

### 15人でつなぎ、タックルする

塚田監督就任4年目となるが、2年目は東の第一シードながら初戦で淀川工と引き分け抽選負け。前年は埼玉県予選で行田工に敗れた。そんな反省から臨んだ1年は、「15人が全員でボールをつなぎ、タックルする」ことを土台に据える。中学までの経験者が他の強豪と比べて極めて少なく、このチームも2人だけ。だから、基本からの繰り返しなくして躍進はあり得ない。それこそ、前任の森喜雄監督（当時・埼工大深谷高監督）も目指した熊谷工の原点だった。

後半5分、熊谷工HO原一郎のトライも、WTB久保田仁の好タックルから始まった。FWで重圧をかけられ、ライン攻撃を猛タックルで阻止される天理。「ウチがやりたいラグビーを逆にされてしまった」と天理・田中克己監督も脱帽した。天理12の反則が示すように、時間の経過とともに焦りが増した。

最後まで天理にゴールラインを割らせず、10点のリードを守りきった熊谷工。塚田監督は、「素人集団でも一つになれば日本一になれることを示せたのがうれしい」と喜んだ。SO新井主将も同じことを言った。「昨年は予選で負け、一度はあこがれの花園でプレーしてみたいと思っていました。大会に向けて、皆の気持ちが一つになった結果です」。

創部43年目、21回目の出場にして初優勝は、埼玉県勢にとっても初の日本一だった。

試合後、塚田監督に続き、観戦に来ていた森前監督も、選手たちの手で宙を舞った。

「教え子の教え子、孫たちがどえらいことをやった」と目を潤ませた。塚田監督に引き継ぐまで、39年間やってきたことが、この優勝につながっていたのだ。

**平成3年1月7日**（月）
▼花園ラグビー場 レフリー：市川明夫

熊谷工高 19（10-6, 9-3）9 天理高

| | | |
|---|---|---|
| 1 | T | 0 |
| 1 | | 0 |
| 0 | G | 0 |
| 1 | | 0 |
| 2 | PG | 2 |
| 1 | | 1 |
| 8 | 反 | 12 |

| 熊谷工 | | 天理 |
|---|---|---|
| 榎岸宏明③ | FW | 橋本陸夫③ |
| 原 一郎③ | FW | 榎村 孝② |
| 中島貴司③ | FW | 松本啓太郎② |
| 金子宏明③ | FW | 駒井慎一② |
| 鈴木貴志③ | FW | 平井恵介③ |
| 堀越利昌③ | FW | 田仲成貴② |
| 佐久間猛③ | FW | 吉川 充③ |
| 岸田 悟③ | FW | 高田 明③ |
| 亀山 昭③ | HB | 西田英樹③ |
| 新井昭夫③ | HB | 文平龍太③ |
| 石川篤史③ | TB | 松隈孝照③ |
| 小林裕一③ | TB | 松村 径③ |
| 川田征宏③ | TB | 古道 智② |
| 久保田仁③ | TB | 八ツ橋修身① |
| 渡部 司③ | FB | 渡辺大吾③ |

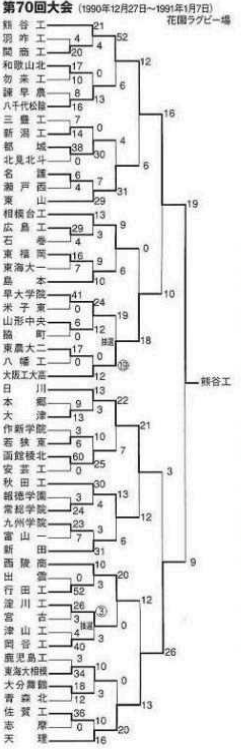
▼得点経過
前半：1分（天）文平PG=0—3
6分（熊）岸田T=4—3
21分（熊）新井PG=7—3
28分（熊）新井PG=10—3
29分（天）文平PG=10—6
後半：5分（熊）亀山T新井G=16—6
11分（天）文平PG=16—9
25分（熊）新井PG=19—9
※名前横の数字は学年

**熊谷工高 19（10-6, 9-3）9 天理高**

ラックからボールをBKに展開する天理SH西田。小柄だが瞬発力に優れ、サイド突破すると簡単には止まらない

熊谷工の支柱、SO新井は11月に、左足ヒザの靭帯を痛めた。しかし、驚異的な回復と精神力で優勝まで戦い続けた

**第70回大会**（1990年12月27日～1991年1月7日）花園ラグビー場




### 15人でつなぎ、タックルする

塚田監督就任4年目となるが、2年目は東の第一シードながら初戦で淀川工と引き分け抽選負け。前年は埼玉県予選で行田工に敗れた。そんな反省から臨んだ1年は、「15人が全員でボールをつなぎ、タックルする」ことを土台に据える。中学までの経験者が他の強豪と比べて極めて少なく、このチームも2人だけ。だから、基本からの繰り返しなくして躍進はあり得ない。それこそ、前任の森喜雄監督（当時・埼工大深谷高監督）も目指した熊谷工の原点だった。

後半5分、熊谷工HO原一郎のトライも、WTB久保田仁の好タックルから始まった。FWで重圧をかけられ、ライン攻撃を猛タックルで阻止される天理。「ウチがやりたいラグビーを逆にされてしまった」と天理・田中克己監督も脱帽した。天理12の反則が示すように、時間の経過とともに焦りが増した。

最後まで天理にゴールラインを割らせず、10点のリードを守りきった熊谷工。塚田監督は、「素人集団でも一つになれば日本一になれることを示せたのがうれしい」と喜んだ。SO新井主将も同じことを言った。「昨年は予選で負け、一度はあこがれの花園でプレーしてみたいと思っていました。大会に向けて、皆の気持ちが一つになった結果です」。

創部43年目、21回目の出場にして初優勝は、埼玉県勢にとっても初の日本一だった。

試合後、塚田監督に続き、観戦に来ていた森前監督も、選手たちの手で宙を舞った。

「教え子の教え子、孫たちがどえらいことをやった」と目を潤ませた。塚田監督に引き継ぐまで、39年間やってきたことが、この優勝につながっていたのだ。

鋭えたスクラムは日本一だと証明した熊谷工。現に、右PR中島貴司は卒業後法大でも日本一を手にしたばかりか、2010年も現役（クボタ）でプレーしている